

文化

打破試みる「共同研究の先駆」

「クラシック音楽をめぐる状況は20世紀初めに一変した。日本や中南米に広がる一方、ヨーロッパでは終焉を迎えた。きっかけは第一次世界大戦です」
10月に開かれた京大大人文学研究所(人文研)の「第一次世界大戦の総合的

綾なす知

80年目の京大人文研

「第一次世界大戦」共同研究会。約40人の多彩な専門家が参加し、7年をかける大型プロジェクトだ(10月12日、京都市左京区・京大大人文学研究所分館)



西洋思想、封建社会、中国遺跡…と多彩なテーマが並ぶ共同研究の報告書や著作

水野直樹・京大大人文学研究所長



京大人文研のルーツは1929(昭和4)年に開設された東方文化学院京都研究所。戦後の49年に旧・人文科学研究所、民間の西洋文化研究所の両組織と合併して新「人文研」が誕生した。昨年、研究所本館は左京区東一条から京大本部構内に移転し、分館は北白川にある。

メモ

研究」の共同研究会。鋭い音楽評論で鳴らす岡田暁生准教授(西洋音楽史)の発表は休憩をはさんで2時間半に及んだ。じつと聞き入るのは人文研の学者と学外の若手研究者たち。
「欧米では従来、音楽と言えば交響曲だったが、軍歌や労働歌、民謡などで『新しい共同体を作る』という運動が起こった。社会と音楽を関連づけて考える発想が出てきた」と語る岡田氏に対し、「そこでいう社会とはどういうもの?」と山室信一教授(法政思想史)

が突っ込む。夜は近くの居酒屋に場所を移し、熱論が続いた。
「第一次大戦は軍事や政治経済に限らず、芸術や思想でも近代から現代に移る大きな転機となった。日本では遠い地の出来事として扱われがちだが、そうした見方も変えていきたい」と山室教授。岡田准教授と

環境変わり存在感に陰り 専門の殻破る気概 若手に

京大人文研。教授、准教授、助教を合わせ所員約60人の組織は、3000人近い教員を擁する京大全体から見れば一つの附置研究所にすぎない。しかし、今年で創立80年の歴史を刻む「人文研」の名は、特別な存在感を内外に示してきた。1960~70年代、中国の貝塚茂樹、仏文学の桑原武夫、生熊学、今西錦司、人類学の梅棹忠夫、西洋史の会田雄次ら日本を代表する碩学が輩出した。その顔ぶれに劣らず注目を集めたのが、異分野の学者たちによる「共同研究」というユニークな手法だ。

「それまでは個人の精緻な研究にとどまっていた人文科学の常識を破り、集団の力で知の地平を切り開いた。日本での学際研究のほしり」。69年から約7年、人文研で助手を務めた樺山紘一・東京大名教授は説明する。
「ルソー研究」「日本の近代化」「フランス百科全書の研究」…。大きなテーマに挑み、明治維新を市民革命と性格づけするなど、時には大胆な視点で世間を驚かせた。マスコミへの積極的な登場も「人文研ブランド」を高め、共同研究のスタイルは全国の大学・研究機関に広がった。

生ずることは減り、いつしか存在感の低下が指摘されることが増えた。「研究者の専門性が高まり、業務も増えて格段に忙しくなった。華やかだった昔とは、人文の置かれた時代背景や研究環境、何から何まで違つた。今年4月、25代目所長に就いた水野直樹教授(朝鮮近代史)は話す。
「今後も現状の共同研究を続けるメリットはあるのか」。こんな所外の声に対し、山室教授は「研究のタコつぼ化が懸念される時代だからこそ、一人では難しい大きなテーマにじっくり取り組む意味がある」と反論する。

かつて「新京都学派の総本山」とうたわれた京大人文研。自由闊達、個性派ぞろいの学者たちが綾なすように共同研究に取り組んできたが、実学重視や成果主義の流れを受け、変容を迫られている。人文研の80年の歩みと現状を見つめ、人文科学のあり方を考える。(道又隆弘、河村亮、芦田恭彦)

毎週水曜連載です。

ところが学際研究の熱気の盛り上がりとは裏腹に、人文研からスター学者が誕生することは減り、いつしか存在感の低下が指摘されることが増えた。「研究者の専門性が高まり、業務も増えて格段に忙しくなった。華やかだった昔とは、人文の置かれた時代背景や研究環境、何から何まで違つた。今年4月、25代目所長に就いた水野直樹教授(朝鮮近代史)は話す。
「今後も現状の共同研究を続けるメリットはあるのか」。こんな所外の声に対し、山室教授は「研究のタコつぼ化が懸念される時代だからこそ、一人では難しい大きなテーマにじっくり取り組む意味がある」と反論する。

かつて「新京都学派の総本山」とうたわれた京大人文研。自由闊達、個性派ぞろいの学者たちが綾なすように共同研究に取り組んできたが、実学重視や成果主義の流れを受け、変容を迫られている。人文研の80年の歩みと現状を見つめ、人文科学のあり方を考える。(道又隆弘、河村亮、芦田恭彦)

毎週水曜連載です。